
俺の高校生活

すぴか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の高校生活

【著者名】

すぴか

【ISBN】

N8981C

【あらすじ】

自称、普通の高校生を描いたラブコメ。しかし、彼は恋愛などに興味はなく、未だに彼女はない……。「あ～あ。俺って本当に彼女欲しいのかなあ……。」

第一話（前書き）

初めて小説を書いてみました。いろいろと変な文章があると思います。
ですが、よろしくお願いします。

第一話

「コラッ！ 今日行けば明日から夏休みなんだからしつかりしない。」

俺の母親が怒鳴る。

「ハイハイ。行つてきま～す。」俺は軽く流しつつも焦つて自転車をとばす。

そうして今日もまた俺の一日が始まった。

ガラガラ～

「今日も遅かつたな。」

少し笑いながら俺の親友の金田宏昭は言った。

紹介が遅れたが、俺の名前は井出裕章だ。私立星海学園の高等部で、どこにでもいそうな普通の高校一年だ。また偶然にも漢字は違うが同じ名前の金田宏昭は中等部からの親友で、いつも一緒に行動している。でもコイツはイケメンだから結構モテてるけど。

「ああ、いつものことだろ。」

「テンション低めに俺は言つ。」

「テンション低いのもいつも通りだな。相変わらず変わってるよな。」

「井出はや。」

「そりか？ 普通だろ。」

そして俺が話題を変えようとすると……

「オイ。終業式始まるからわざわざと体育館に集合だ。」

「「は〜〜〜〜」」

そして俺らは終業式を終え、すぐにみんな帰り始めた。

もちろん俺も荷物をまとめる。

「オ〜イ。金田。帰ろ…………」

俺が言い終わる前に教室の扉が開いた。

「井出先輩ですよね。」

「? ?」

そこには俺の名前を知っている女子と、その子のことを見たこともない俺がいた。

金田が小声で言つ

「誰？この子？」

「知らん。」

そして俺は目の前の少女に言つ。

「誰？アンタ？」

俺は結構人見知りが激しいので、初めて話す人にはかなり冷たい態度をとる。別に自分ではそんなつもりないんだが…………。ただ、自分を弁護しようと、俺は慣れた人とはよく話すのだ。だから友達の間ではよく笑いなどをとつている。

俺の冷たい態度に少女はちょっとうつむいてしまった。

クラスの女子が

「ヒド〜イ」などと言つてゐるが、ウチのクラスの女子はほとんど

がブサイクなので、俺は全く気にしない。

「…………。」

そうは言つても対応に困つていると、急に少女が笑つて顔を上げた。

第一話

「先輩のメールアドレス教えて下さーいっ！」

「…………」

なんなんだ、急に……

俺の後ろでは金田の笑い声が微かに聞こえる。

「ああ、悪いけど俺って自分のアドレスとか覚えてないんだよね。」

これは事実だ。いたずらメールが嫌で自分でも覚えられないアドレスにしたのだ。しかもウチの学校は携帯を持って来るのは禁止だ。

しかし、田の前の少女はまたにっこりとしていた。

「実は前に他の先輩に聞いたので、もう知ってるんですよ。今日はそのことの許可とうつと思つただけで……。」

とんでもないことを言い出した。そんなすぐに教えられたら俺が分かりにくいアドレスにした意味がない。てか、俺に許可なく教えた奴誰だ。

「じゃあ今日メール送りますね～。あつー！それと私、中三の中山佐紀つていいます。」

そうして、俺の返答も聞かずに中山佐紀は教室から去つていった。

「いいなあ～。あの子絶対お前に惚れてるぜ。」

自転車を押して、歩いて金田と帰つてたら、急にそんなことを言つ

出した。

「んなわけねえだろ。」

そう言いつつ内心ちょっと期待してた。

「なあ、井出。あの子に中二のカワイイ子を紹介してもらってよ。」「ふざけんなよ。俺がそんなこと出来るかよ。」

「あ～あ。カワイイ彼女欲しいなあ。」「そつか？」

何のために彼女欲しいんだろ……。俺も昔彼女がいた。確かに一緒にいて楽しかった。でも一緒にいて楽しかつただけに、別れた時に本当に辛かつた。彼女の浮気が原因だったけど、俺はあのとき本当にアツイことが好きで……。

「あ～あ。俺って本当に彼女欲しいのかなあ……。なんとなく、自分に言つてみる。」「なんだ、それ。」

金田は笑つて答えてくれた。

「キヤー！」

そんな時、悲鳴が聞こえた。

「なんだ！？」

俺と金田は急いで声のする方へと、走った。

「うう……。助けてくれ……。」田の前には中学生らしき男が三人倒れている。

俺がやつたわけじゃない。金田だ。こんなとき、コイツは本当にかつこいいよなと思つ。

「大丈夫か？」

金田が女の子に声をかける。女の子にケガはないようだが、恐怖からか、微妙に震えていた。

「……ありがとう。」

女の子が顔を上げてドキッとした。同じクラスの山下愛理だった。以前から笑顔がカワイイな、と思つて、俺もよく話しをしてたので少し好意は持つていた。

「ワリィ、井出。俺、山下家まで送つていってやるよ。」

「ああ。そうしてやれよ。」

「……ゴメンね。金田君。」

そうして俺は一人と別れた。

家に帰ると、すぐに金田から電話がかかってきた。

「帰り道に山下に告白された。だから、付き合つことにしたよ。結構カワイイしな。」

「オオ。良かったじゃん。明日から夏休みだし、たっぷり遊べるな。」

「まあな。じゃ、またな。」ガチャン

なんだか分からぬけど、心が重く感じた。今さらだけど、俺山下に好意とかじやなくて、本当に好きだったのかな……。

それはない！

そう自分に言い聞かした。仮に好きだったとしても、告白したり、金田に相談したりしなかつたのだ。なにより好きだといつ気持ちにすら気付かなかつた……。

ショックを受けてベットに飛込んだ俺の横で、携帯はメールを受信した。でも、それに気づかないくらい俺はショックだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981c/>

俺の高校生活

2010年12月10日19時37分発行